

宗教的利益観についての研究

『教行信証』を中心として

中山 彰 信

要 約

今回は京都大学で行われた第六十三回日本宗教学会において発表した、宗教における利益観の中でも真実を求めて求道した親鸞の利益の考え方を求めたものである。親鸞の利益観を最も顕著に表された著書『教行信証』を中心として考察する。

宗教的利益といえは占いか呪術（呪文）による超自然的力と自己の願望による願いと行為によつて得るものと捉えられていることが考えられる。しかし、その利益は利益の真实性を示すものと考えてよいものである。利益は人間の願望のうちに成り立つものであるが、何か不自然さを感じるのである。人間の利益に対する考えは何か穢れた捉え方をしているように考えるのである。そこで、宗教的利益を如何に捉えるべきであるかについて、親鸞に問うことにするのである。

親鸞の『教行信証』を見るに、この書は真実を顕すと示されている。仏教（佛）の教・行・証を示す重要な論点を示すものである。そこで、絶対者の示す利益とは衆生の救済を抜きにしては考えられない。親鸞は三経七祖の流れを受けて利益について究明されている。

『教行信証』の教巻の冒頭に「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。」と示され、仏の願心から回向された利益であることを明かされる。この書全体が絶対的利益観を示すものであることを親鸞は考えていたようである。故に、証巻の四法結釈に「それ真宗の教行信証を案ずれば、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまえるところにあらざる」とあることなし。因、浄なるが故に果また浄なり。知るべしなり」と示し、利益は仏の願心から回向される因果の道理にそつたものであることを明かされる。

世間的利益は衆生の願心から願う行為であるが、真実の利益は絶対的願心から与えられる利益であることを明かされている。

はじめに

親鸞の教義を研鑽していく中で利益観を考察することは、如来の救済が如何なることであるかを明らかにする重要な論点だと考える。特に、自己における救済を明らかにしていくことは欠かせない研究

課題である。親鸞の教義の根幹は三経七祖の経釈にあることはいうまでもない。その三経七祖の流れを受けられた親鸞は利益について如何に捉えられていたであろうか。利益に関して親鸞は『教行信証』『教巻』の冒頭に

謹按浄土真宗、有二種廻向。一者往相、二者還相。就往相廻向、有眞實教・行・信・證。^{〔1〕}

（謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について眞実の教行信証あり。）

と示され、ここに往相・還相の二種廻向が示される。このことは、浄土真宗の二種の廻向は如来の願心から廻向された利益であることを明かされる。そして、「証巻」の四法結釈に

夫案眞宗教・行・信・證者、如来大悲廻向之利益。故若因若果、无有一事非阿彌陀如来清淨願心之所廻向成就。因淨故、果亦淨也。應知。^{〔2〕}

（それ眞宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲廻向の利益なり。故に、もしは因、もしは果、一事として阿彌陀如来の清淨願心の廻向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、淨なるが故に果また淨なり。知るべしとなり。）

と示され、眞宗の教・行・信・証は如来の願心から廻向された利益であることを結釈として示される。その後、

二言還相廻向者、則是利他教化地益也。^{〔3〕}
（二つに還相の廻向といふは、すなわちこれ利他教化地の益なり。）

と示され、還相廻向は利他教化地の益と改めて示してあることは別益として、他力大乘菩薩道の益として示される。

しかし、今回は二種の廻向である往相廻向の現当二益を中心に考察していきたい。

そこで存覚は『六要鈔』の証巻釈のところで

定聚・滅度は二益歟、又一益歟。答。是二益也。^{〔4〕}

（定聚・滅度はこれ二益か、また一益か。答えて、これ二益なり。）

と、現益・当益を述べられ、また蓮如は『御文章』一帖目の第四通に信一念について、

一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つぎに滅度は浄土にてうべき益にてあるなりとこころうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。^{〔5〕}

と述べられている。

一

そこで利益に関してその根本義を明らかにする為に、『大無量寿経』の教説について考察しておく必要性を考える。

『大無量寿経』の中で利益にかかわる文言を調べてみるに出世本壊の文に、

如來以無蓋大悲矜哀三界。所以出興於世、光闡道教欲拯羣萌惠以眞實之利。⁽⁶⁾

(如來、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に出興するゆえは、道教を光闡して群萌を拯ひ、恵むに眞實の利をもつてせんと欲してなり。)

と示されている。これは親鸞が『教行信証』教巻に眞宗大剛を示された後に引用された文でもある。ここに「眞實の利」として利益を示してある。このことは仏願力回向による利益であることを顕していると考ええる。その後『大無量寿経』下巻の胎化得失の文と弥勒付属の文に

彌勒當知、其有菩薩、生疑惑者、爲失大利。⁽⁷⁾

(弥勒、まさに知るべし。それ菩薩ありて疑惑を生ずるものは、大利を失すとす。)

と、

佛語彌勒。其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍、乃至一念。當知、此人爲得大利。則是具足無上功德。⁽⁸⁾

(仏、弥勒に語りたまわく、それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなはち、これ無上の功德を具足するなりと。)

と、利益を「大利」と、この大利は出世本壊に出ている「眞實の利」を意味するものである。弥勒付属の文は『教行信証』行巻の行一念釈にも引用される文で、親鸞は「大利」について自釈をほどこして、

言大利者、對小利之言。言无上者、對有上之言也。信知、大利无上者、一乘眞實之利益也。小利有上者、則是八萬四千假門也。⁽⁹⁾

(大利といふは小利に對せるの言なり。無上といふは有上に對せるの言なり。まことに知んぬ、大利無上は一乘眞實の利益なり。小利有上はすなわちこれ八萬四千の假門なり。)

と示し、如來の利益は一乘眞實の利益であつて、八萬四千の假門の利益は小利有上であることを示している。そこで「眞實の利」とは如何なるものであるか。「眞實」それ自体を明かされたのが、天親の『淨土論』で

我依修多羅 眞實功德相⁽¹⁰⁾

(我修多羅眞實功德相に依つて)

と、如来浄土の真如にかなって衆生救済に働く相が真実であると示し、曇鸞はそれを釈して『浄土論註』巻上に、この真実功德を示し、

眞實功德相者、有二種功德。一者、從有漏心生不順法性。所謂凡夫人天諸善、人天果報、若因若果、皆是顛倒、皆是虛偽。是故名不實功德。二者、從菩薩智慧清淨業起莊嚴佛事。依法性入清淨相。是法不顛倒、不虛偽、名眞實功德。云何不顛倒、依法性順二諦故。云何不虛偽、攝衆生入畢竟淨、故。¹¹⁾

（真実功德相とは、二種の功德あり。一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いはゆる凡夫・天の諸善、人・天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。このゆへに不実の功德と名づく。二つには菩薩の智慧清淨の業より起りて仏事を莊嚴す。法性によりて清淨の相に入れり。この法顛倒せず、虚偽ならず、真実の功德と名づく。いかに顛倒せざる。法性により二諦に順ずるがゆへに。いかに虚偽ならざる。衆生を摂して畢竟淨に入らしむるが故にと。）

と、この中で真実を釈するに、功德について真実功德と不実功德があり不実功德とは顛倒・虚偽で法性に順ぜず、真実功德とは不顛倒・不虚偽で法性に順じるが故に、大悲を得る。不顛倒とは法性に随順する智慧であり、不虚偽とは衆生を摂取して浄土に生まれる慈悲であると明かされる。親鸞は「一念多念文意」にその意を

「真実之利」とまふすは、弥陀の誓願をまふすなり。しかれば

諸仏のよにいでたまふゆへは、弥陀の願力をときて、よろづの衆生をめぐみすくはむとおぼしめすを、本壊とせむとしたまうがゆへに真実之利とはまふすなり。¹²⁾

と示し、「真実之利」は如来の不顛倒・不虚偽の功德と同一の悟りに到達することであり、智慧慈悲円満・自利不二の悟りに到達することである。最大の理想である大菩提の徳を有する真実の利益を得ることを明かしている。

また、利益については五惡段の終わりに

佛所遊履國邑・丘聚、靡不蒙化。天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起。國豐民安、兵戈無用、崇徳興仁、務修禮讓。¹³⁾

（佛の遊履したまふところの国邑・丘聚、化を蒙らざるはなし。天下和順し日月清明なり。風雨時をもつてし、災厲起らず、国豊かに民安くして兵戈用いることなし。徳を崇め仁を興し、つとめて礼讓を修すと。）

と、仏願力の名号を領受することによって展開していく利益を明かす。仏願力の信心によって展開していく平和にして明るい社会の相を現したもので「兵戈無用」などの世界は念仏の精神を体験することによってのみ実現される利益であることを示している。以上が『大無量寿経』に示された一乘真実の利益である。

二

そこで、親鸞は利益について『教行信証』には如何に示されているであろうか。初めに述べたが『教行信証』教巻の二種の回向は、『教行信証』を作成するにあたり、仏願力による衆生救済への利益として強く意識されていた文言であると考えられる。「行巻」を窺うと大行出体釈に

謹按往相廻向、有大行、有大信。大行者、則稱无導光如来名。斯行、即是攝諸善法、具諸德本、極速圓滿、眞如一實功德寶海。故名大行。然斯行者、出於大悲願。⁽¹⁴⁾

(つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなわち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなわちこれらもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速圓滿す、眞如一実の功德宝海なり。ゆえに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願より出でたり。)

と示され、名号に破満の徳のあることが顕されている。そして、この名号(念仏)は、

爾者、稱名能破衆生一切无明、能滿衆生一切志願。稱名則是最勝眞妙正業、正業則是念佛、念佛則是南无阿彌陀佛。南无阿彌陀佛即是正念也。可知。⁽¹⁵⁾

(しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よ

く衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなわちこれ最勝眞妙の正業なり。正業はすなわちこれ念仏なり。念仏はすなわちこれ南無阿彌陀仏なり。南無阿彌陀仏はすなわちこれ正念なりと、知るべしと。)

と、如来の光明に衆生の無明の闇を除く利益にあることが表されている。称名に破満の利益があるということであり、如来の光明が破満の利益によるものであることが知られる。

また、六字釈をつけながら「必得往生」について

言必得往生者、彰獲至不退位也。經言即得、釋云必定。⁽¹⁶⁾

(必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。經(大經)には即得といえり、釈には必定といへり。)

と示し、「必得往生」とは不退の位に至ることであり、大經には「即得」と示され、釈には「必定」と述べられている。「必得」は第十八願成就文の「即得往生」であり、「必定」は龍樹の『易行品』に示される「即時入必定」を指している。このことは現生正定聚の益を示すものである。

また、行信利益の文にも、

爾者、獲眞實行信者、心多歡喜故、是名歡喜地。是喻初果者、初果聖者、尚睡眠懶墮、不至二十九有。何況十方群生海、歸命斯行信者、攝取不捨。故名阿彌陀佛。是日他力。是以龍樹大士、^(十住毘婆沙論) 曰「即時入必定」、曇鸞大師、^(論註) 云「入正定」^(卷五 易行品)

聚之數。⁽¹⁷⁾

（しかれば真実行信を獲れば、心に歡喜多きがゆへに、これを歡喜地と名づく。これを初果に喩ふことは、初果の聖者、なほ睡眠し懶墮なけれども二十九有に至らず。いかにいはんや十方群生海、この行信に歸命すれば損取して捨てたまわず。ゆへに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。ここをもつて龍樹大士は、「即時入必定」といへり。曇鸞大師は「入正聚之數」といへり。）

と、名号の働きによつて衆生にむけられた仏願力によつて、心多歡喜の益が生まれる。この点にも現生正定聚の益が示される。このことは現生において正定聚に入つたことを意味する利益であり、「行信の利益」の働きであることを示される。

その後、兩重因縁の文に真実の信を内因とし、光明名号を外因として、真実報土に往生する利益であることが明かされる。それ故に親鸞は一乘真実の利益は「大利」であると明かされ、その大利は無量光明土に到りて大般涅槃を証することを明かし、往相回向の利益を示される。その大利は普賢の徳の功徳であると。それは浄土に往生したものが再びこの世へもどり、普く衆生を済度するといふ大慈大悲の徳で、還相回向の利益であることを明かす。

また、『正信念仏偈』の偈前の文は、正信念仏が仏願力回向の名号の利益による感謝の思いから生まれたものととらえられ、知恩報徳の益が示されている。「行巻」においては如来の仏願力の利益が衆生の隅々まで働き続けていることが述べられる。

三

親鸞は仏願力の働きによつて現れてくる現生の利益を「信巻」に示される。「信巻」の標拳に「至心信樂之願 正定聚之機」と正定聚の益を回向された信心の機を示される。「信巻」では本文の始めに信心の機について

然常没凡愚、流轉群生、无上妙果不難成、眞實信樂實難獲。何以故、乃由如來加威力故、博因大悲廣慧力故。遇獲淨信者、是心不顛倒、是心不虛偽。是以極惡深重衆生、得大慶喜心、獲諸聖尊重愛也。⁽¹⁸⁾

（しかるに常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し。なにをもつてのゆえに、いまし如来の加威力によるがゆえなり、博く大悲広慧の力によるがゆえなり。たまたま淨信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。ここをもつて極惡深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。）

と、機の信心は如来が衆生救済するために加せられた利益であると。ここでも再度真実の意味として、不顛倒・不虚偽であることを示される。

その後、三二問答によつて第十八願文と第十八願成就文によつて、「信心」をきめこまかに述べられる。その信心について第十八願成就文の釈の中に、信心の利益として現生十種の益が説かれる。

その現生十種の益は第十八願成就文の「即得往生 住不退転」を釈する文である。

獲得金剛真心者、横超五趣八難道、必獲現生十種益。何者爲十。一者冥衆護持益、二者至德具足益、三者轉惡成善益、四者諸佛護念益、五者諸佛稱讚益、六者心光常護益、七者心多歡喜益、八者知恩報德益、九者常行大悲益、十者入正定聚益也。⁽¹⁹⁾

(金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。何ものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏稱讚の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。)

この文について釈文も引文もないのであるが、親鸞は『華嚴經』の「聞此法歡喜信心(この法を聞きて歡喜信心す)。」について、『華嚴經』の文言では、

聞此法歡喜信心、無疑者速成无上道、与諸如来等。⁽²⁰⁾
(この法を聞きて歡喜信心す、疑なき者は速やかに無上道を成らん。諸如来と等し。)

と示されるものを、親鸞は『末燈抄』に

信心歡喜者、与諸如来等。⁽²¹⁾

(信心歡喜は諸如来とひとし。)

と、「歡喜信心」の文言を「信心歡喜」と読みかえられ信心のうえでの利益であることを示めされる。信心を獲て五趣八難を超えてとは当益を示し、現生に十種の益を獲るとは現益を示す。他力の信を得た衆生は、必ず現生に十種の益が備わることを明かしている。この十種の益の中、第十の入正定聚の益は総益であって、他の九つは別益と古来より述べられている。

この入正定聚の益は『華嚴經』に「諸如来等」と如来と等しとも言われ絶対的価値をいただいたことよって、因徳が円満し寸分も狂うことがないことを示し、当来に必ず成仏すべきことを意味する。

他の九種の利益は名号の徳が生活の上になじみ出て、念仏の衆生が体験できる利益である。即ち冥衆護持・諸仏護念・諸仏稱讚・心光常護の益は生活の上に諸仏に守られているという守護感を味わい、至徳具足の益は生活の上に安定感が生じ、転悪成善の益は自己を反省する慚愧の心が生じ、心多歡喜の益は明るい心と人生を創造していく勇氣が芽生え、知恩報徳の益は如来の恩寵によつて眞実に生き抜く道をひろめていくという使命感を生じさせる。

現生十種の益は念仏行者に与えられた精神的・自覺的利益であつて、物質的・官能的な利益ではない。しかし、心に絶対的価値たる名号を領受すれば、信心の生活の徳として、息災延命や七難消滅などの利益も得られてくるのである。

『大無量寿經』の「兵戈を用つること無し」と示されるのもこの意味である。このように現世利益を解かれるのである。如来より奇跡的・魔術的・物質的な利益を与えられたものではなく、信心が縁

となつて因果の道理に従つた展開へ変わつてくるのである。

信心に利益である現生十種の益が示された後、仏願力による信心は金剛の信心であることを明かし、これに続いて横超断四流釈と真仏弟子釈が示される。これは信心によつて得る利益で、横超断四流釈は当来（当益）で、真仏弟子釈は現生における信心の利益（現益）である。この横超断四流釈と真仏弟子釈の引文の内容から、ここでは現生の益である真仏弟子釈を主として説かれているのである。真仏弟子釈について

言眞佛弟子者、眞言對偏對假也。弟子者釋迦諸佛之弟子、金剛心行人也。由斯信行、必可超證大涅槃故、曰眞佛弟子。⁽²²⁾

（眞の仏弟子といふは、眞の言は偽に對し仮に對するなり。

弟子とは釈迦諸佛の弟子なり。金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、眞の仏弟子といふ。）

と、眞の仏弟子とは、金剛心の行人すなわち信心の行者をいうのである。衆生の信心となり、称名となつて働く名号によつて必ず大涅槃を証すべき人となる。この眞仏弟子は現生において正定聚に入ることが確約される利益であることを示されている。その後

『大本』^(大經卷上)言。「設我得佛、十方无量不可思議諸佛世界衆生之類、蒙我光觸其身者、身心柔熾超過人天。若不爾者不取正覺。設我得佛、十方无量不可思議諸佛世界衆生之類、聞我名字、不得菩薩无生法忍、諸深捻持者、不取正覺。」⁽²³⁾

（『大本』にのたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが光明を蒙りてその身に触れるもの、身心柔軟にして人・天に超過せん。もししからずは正覺を取らじと。たとひわれ仏を得たらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが名字を聞きて、菩薩の無生法忍、もろもろの深捻持を得ずば、正覺を取らじ」と。）

と、眞仏弟子の得る利益でも『大無量寿經』の第三十三願・触光柔軟の願、第三十四願・聞名得忍の願が示される。すなわち光明と名号の働きによつて眞仏弟子となる信心が得られるのであつて、このことは「行巻」の両重因縁の文で述べられる。光明と名号という外因の働きから利益が生まれることは光明と名号が信心をおこすはたらきを示すことである。故に、信心に伴つて得られる現世利益（現生十種）も光明と名号の働きから展開したものと考えられる。

又、第三十四願・聞名得忍の願が引用されていることは「菩薩の無生法忍、もろもろの深捻持を得る」とは名号にこめられている無上の功德をうることであり、名号を聞信するとき功德が具足することとあらわされるのである。このようにして二十三の引文が引かれ、眞仏弟子の利益が示される。この信心の利益を当益と現益とで釈され、眞の仏弟子は阿弥陀如来の本願を説く釈迦及び諸仏方の弟子であり、金剛心を得た行人であり、眞実の信行によつて仏果、大涅槃を超証していく人であることを示している。これらの引文の中に善導の『往生礼讃』の引文があり、

自信教人信、難中轉更難、大悲弘普化、眞成報佛恩。⁽²⁴⁾

(みずから信じ、人を教えて信ぜしむること、難きがなかにうたまた難し。大悲ひろくあまねく化する。まことに仏恩を報ずるになると。)

これは本来善導の『往生礼讃』の文「大悲伝普化」を智昇大師の『集諸経礼讃儀』が「大悲弘普化」となおされ、自ら教えを信じて人に伝えていくことは難しく特に大悲を伝えることほど難しいことはない。従つて、自らの力で仏の大悲を伝えていくことは不可能であるが自ずから仏の大悲は弘まっていくなのであると「弘」の言葉に本願他力の働きと捉えられている。また、王日休の『龍舒浄土文』を引文し、

王日休(浄土文卷一〇)云、「我聞无量壽經、衆生聞是佛名信心歡喜、乃至一念、願生彼國、即得往生、住不退轉。不退轉者、梵語謂之阿惟越致。法華經謂彌勒菩薩所得報地也。一念往生、便同彌勒。佛語不虛、此經是往生之徑術、脫苦之神方、應皆信受。」⁽²⁵⁾

(王日休がいはいはく、「われ無量壽經を聞くに、衆生この仏名を聞きて信心歡喜せんこと乃至一念せんもの、かの國に生ぜんと願すれば、すなはち往生を得、不退轉に住すと。不退轉は梵語にはこれを阿惟越致といふ。法華經にはいはい、彌勒菩薩の所得の報地なりと。一念往生、すなはち彌勒に同じ。仏語虚しからず、この經はまことに往生の徑術、脱苦の神方なり。みな信受すべし」と。)

と、「便同彌勒」の言葉をだし、現生において正定聚に住する真仏弟子は彌勒と同じであると讃嘆されるのである。真仏弟子釈において経釈二十三文引用して現生における利益を表される。それを受けて真仏弟子釈全体を結んで、便同彌勒釈がどこされ、

眞知、彌勒大士、窮等覺金剛心故、龍華三會之曉、當極无上覺位。念佛衆生、窮横超金剛心故、臨終一念之夕、超證大般涅槃。故曰便同也。加之、獲金剛心者、則與韋提等、即可獲得喜・悟・信之忍。是則往相廻向之眞心徹到故、籍不可思議之本誓故也。⁽²⁶⁾

(まことに知んぬ、彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるがゆえに、龍華三會の曉、まさに無上覺位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を極むるがゆえに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆえに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲るものは、すなわち韋提と等しく、すなわち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなはち往相廻向の眞心徹到するがゆえに、不可思議の本誓によるがゆえなり。)

とのべられ、念仏の衆生は横超の金剛心を窮めるがゆえに、彌勒と同じであることをあらわし、臨終の一念に大涅槃にいたることは往生即成仏の当来の益を示す。また、金剛の信心を獲るものは韋提と等しいことは現生においての正定聚の益をつることで現益を示している。このことは現生における信心の利益が現生正定聚であることを示し、当来の利益が往生即成仏であることを明かす。往相廻向の信心の利益であることを示されているのである。このように本願他力の念仏が如何に優れた教えであり、このことは無上な信心の

利益であることをあかす。彼土得証を基底とする浄土教において、凡夫が仏と等しいということは凡夫においては考えられないことである。

親鸞は本願他力の念仏による現生における信心の利益が明らかに現生において正定聚に入ることと約束される。信心獲得の一念の因が往生即成仏にまさしく定まること、つまり現生にて正定聚に入ることが此土・穢土に生きる衆生の救いなのである。それを慶びとして捉えられる。親鸞は便同弥勒の後に

誠知、悲哉、愚禿鸞、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利太山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可恥可傷矣。⁷⁷

（まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入らざることを喜ばず、眞證の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし傷むべしと。）

と述べられ、正定聚に入らざることを喜ばない身であることも示している。また如来と等しい立場に成らせてもらいながら、凡夫は臨終の一念に至るまで煩惱具足の凡夫であることを悲嘆しておられるのである。このことは凡夫の思いはこの世における執着が強く、物質的・官能的な思いに迷わされる煩惱に、悩まされていることを嘆かれていますのである。

四

「信巻」末においては、名号の働きにおける眞実信心によつて、現生で正定聚の利益を得、臨終の一念に往生即成仏する利益を得る。現益と当益が往相回向の利益であることが明かされる。

親鸞はその根本義、眞実信心によつて当来する眞実の証について、

謹顯眞實證者、則是利他圓滿之妙位、无上涅槃之極果也。即是出於必至滅度之願、亦名證大涅槃之願也。然煩惱成就凡夫、生死罪濁羣萌、獲往相回向心行、即時入大乘正定聚之數。住正定聚故、必至滅度。⁷⁸

（つつしん眞実の証を顯さば、すなわちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなわちこれ必至滅度の願より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必滅度に至る。）

と、眞実信心となり称名念仏になる名号の働きを領受した即の時に、正定聚に住し、必ず滅度に至る。それは本願他力によつて一乗眞実の利益が満ちあふれた世界である。この証果の世界は利益・往生が定まったことを意味し、往相回向の信心は無上の果の利益であることを明かしている。「証巻」は大悲の完全な姿であることを。故に、最初にも示したが「証巻」の四法結釈は教・行・信・証の四法は因

果ともに清浄で真実な悟りそのものであることを結びで示している。このことは本願念仏の利益が如何に真実な清浄なものであり、因果の道理を正しく示した真理であるかを論理的に示し、その利益が現当二益の往相回向であることを明かす。その後には

二言還相回向者、則是利他教化地益也。⁽²⁶⁾

(二つに還相の回向といふは、すなわちこれ利他教化地の益なり)

は、還相回向本来の意味を示すもので、他力の教化地とは本願他力によって迷える衆生を済度してくる如来の根源からの働きである。故に、『大無量寿経』には「普賢大士の徳に遵へり」と述べられ、仏願力の利益ということは如来の働きを意味するものであるといえる。また、還相回向は往生したものが即成仏となり衆生済度していくことを示している。この二種の回向こそ親鸞の利益観と考える。

結

以上のことから、親鸞の利益観は教・行・信・証の四法全てに示される仏願力名号の働きで、親鸞は阿弥陀仏の仏願力回向に全てが包まれていることに気づかれた。故に、目先の利益に惑わされることなく、真の利益は因果の道理にそった真実の教えであることに気づかれる。それは利他教化地の益を示す還相回向という根本義に気づかれ往相の利益、現益・当益の本質的意味である。

本質的に仏願力の利益は真如からの働きによって回向されていく利益である。故に、現益・入正定聚となり、当益・往生即成仏となる究極の利益をたまわることができると幸せを慶ばれたと考える。

この利益の捉え方から考えると我々が日常考えている利益観は宗教の本質の歪みを造っているように考える。それは超自然的な力によって自己の願望・目的を達成するための利己的な利益である。御利益は衆生の願望達成の目的で、超自然な力をコントロールすることを目的とした穢れた思いの恥ずべき姿でもある。現代の宗教が、特に空想の利益観を人々が求めていることを考えると、物事の本質が因果の道理によって展開していることを忘れてしまっていることは科学技術が進歩しているにもかかわらず、人の心は発展性のない変化のない自己中心的願望と嘆かざる得ないのである。本当の利益観は生かされている感謝の念に尽きることに至るのである。

註

- | | | | |
|-----|--------|---|------|
| (1) | 真宗聖教全書 | 卷 | 二頁 |
| (2) | 同 書 | 卷 | 一〇六頁 |
| (3) | 同 書 | 卷 | 一〇六頁 |
| (4) | 同 書 | 卷 | 三二一頁 |
| (5) | 同 書 | 卷 | 四〇七頁 |
| (6) | 同 書 | 卷 | 四頁 |
| (7) | 同 書 | 卷 | 四四頁 |
| (8) | 同 書 | 卷 | 四六頁 |

(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷
一〇六頁	一〇三頁	八〇頁	七九頁	七九頁	七七頁	七五頁	七五頁	六六三頁	六三頁	七二頁	四八頁	三三頁	二二頁	八頁	四一頁	六一四頁	二八四頁	一三頁	三四頁	三四頁

参考資料

- 山辺習学・赤沼智善 共著『教行信証講義』一九六四年 法蔵館
- 星野元豊 著『講解教行信証』一九九六年 法蔵館
- 稻城選恵 著『歎異抄の研究』一九八五年 探求社
- 神子上恵龍 著『真宗教学の研究』一九七二年 永田文昌堂
- 早島鏡正 著『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』
- 一九八八年 武蔵野女子大学仏教文化研究所
- 松野純孝 共著『歴史への視点』一九八五年 桂書房
- 村上速水 著『親鸞教義の研究』一九六八年 永田文昌堂
- 浅井成海 共著『仏教文化研究所紀要（法然の現世利益観）』
- 一九七七年 龍谷大学仏教文化研究所
- 同 『真宗学（親鸞の現世利益観）』第一〇五号
- 林 智康 共著『仏教文化（親鸞聖人の現世利益観）』第二号
- 本多静芳 共著『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要（仏教に説かれる利益 親鸞の現世利益に至る周辺）』
- 一九八八年 武蔵野女子大学仏教文化研究所